

令和5年
第9回定例会議事録

令和5年9月28日

泉大津市教育委員会

令和5年9月28日(木)午前10時より令和5年第9回泉大津市教育委員会
会議定例会を泉大津市役所3階301会議室に招集した。

出席委員

教育長	竹内 悟
教育長職務代理者	澤田 久子
教育委員	西尾 剛
教育委員	池島 明子
教育委員	奥 健一郎

出席事務局職員

教育部長	丸山 理佳
教育部次長兼教育政策統括監	鍋谷 芳比古
教育部教育政策課長	大塚 和弘
教育部指導課長	藤谷 考志
教育部生涯学習課長	中山 裕司
教育部スポーツ青少年課長	大和 宏行
健康こども部参事兼こども育成課長	里見 崇
指導課長補佐	表 一成
指導課長補佐	山本 圭亮
教育部教育政策課	三上 達朗
教育部教育政策課	友永 彩絵

案件

日程第 1 報告第 1 6 号 令和5年度全国学力・学習状況調査等の結果概要について

日程第 2 報告第 1 7 号 泉大津市教育委員会の後援名義使用について

自由討論

議事録署名委員

教育委員 奥 健一郎

会議の顛末

○竹内教育長 令和5年第9回教育委員会会議定例会の開会宣言

○令和5年第8回教育委員会会議定例会議事録承認

△報告第16号 令和5年度全国学力・学習状況調査等の結果概要について

◎指導課長（藤谷考志）調査目的は、義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組みを通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立するというものです。

調査対象は、小学校6年生、中学校3年生です。

調査事項は、小学校は国語・算数、中学校は国語・数学・英語です。また、調査する学年の児童生徒を対象に、学習意欲・学習方法・学習環境・生活の諸側面等に関する質問調査、加えて、学校における指導方法に関する取組みや学校における人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する学校に対する質問紙調査があります。

結果概要については別紙1～5のとおりです。担当より詳しく説明させていただきます。

◎指導課長補佐（山本圭亮）私からは主に小学校の結果についてお伝えさせていただきます。3ページをご覧ください。まず、平均正答率・無回答率について校種別に説明します。小学校について、本市は正答率が国語69%、算数63%でした。これは、大阪府・全国どちらをも上回っております。無回答率は、国語・算数ともに大阪府・全国を下回りました。

一方、中学校の正答率については、国語63%、数学44%、英語39%です。こちらは大阪府・全国どちらをも下回っております。無回答率に関しましても、全ての教科において大阪府・全国より高いという結果でした。

4ページから8ページに関しては、この後詳しくお伝えするので割愛します。

9ページをご覧ください。小学校の国語に関する結果です。まず、左上のグラフをご覧ください。正答数の分布は、総問題数14問中11問を頂点とする右寄りの山形を描いております。その下のグラフは問題形式別の正答率を示しており、左から選択式、短答式、記述式です。全国平均と比べて全ての解答形式で正答率が高く、特に短答式と記述式が高くなっています。無回答率については、全国平均と比べて、全ての回答形式で低くなっております。

続いて右上の表をご覧ください。「国語の勉強は好きか」という質問に対して、65%の児童が肯定的回答をしており、大阪府・全国よりも高い結果となりました。

「国語の勉強は大切か」「国語の授業の内容はよく分かるか」「国語の授業で学習したことは将来社会に出たときに役に立つと思うか」という質問に対しても、9割を超える児童が肯定的回答をしていました。

続いて、結果が特徴的だった問題についてご説明させていただきます。説明資料に、白と黒のひし形がありますが、白が「比較的できている点」、黒が「課題のある点」を示しています。比較的できている点とは、様々な調査結果の分析を参照すると正答率が7割を超えているものを「比較的できている」としているものが多かったため、それを基準に7割を超えたものを「比較的できている」としてあります。

「言葉の特徴や使い方に関する事項」について、漢字を文の中で正しく使うこ

とは、引き続き課題があり、特に同音異義語の漢字の使い方には課題が見られました。例えば、「いがい（意外）に雑草が生えてきて」の「いがい」の漢字を選ぶという問題です。こちらの問題の正答率は53.1%でした。タブレット端末で文字を入力する機会が増え、端末の予測変換に頼ることも少なくないと思われませんが、学習場面や日常生活において、意識的に漢字を読んだり書いたりすることが大切だと考えております。基礎的・基本的な言葉の力は、どの教科においても必要な力となりますので、今後も国語だけでなく、他教科においても、子どもたちの言葉の力を育む必要があります。

続いて10ページをご覧ください。「情報の扱い方に関する事項」ですが、こちらは平成29年告示の小学校学習指導要領で新設されたもので、本調査で取り上げられるのは初めてです。どちらも7割を切っており、本市の課題だということが伺えます。

続いて11ページの下「話すこと・聞くこと」についての問題、12ページの「書くこと」についての問題、どちらも記述する問題ですが、3つの条件が示されていて、その条件をすべて満たして書けたら正解というものです。子どもたちの解答を見ると、1つの条件はクリアしているが、あとを満たしていないというものがよく見られます。複数の情報を用いて自分の考えを伝えるというところに課題があると考えております。

続いて14ページをご覧ください。算数についてです。左上のグラフは正答数の分布ですが、総問題数16問中11問を頂点とする右寄りの山形を描いております。下のグラフで示されている解答形式別の正答率では、記述式が全国平均と比べてやや低くなっております。無回答率に関しましては、すべての解答形式で低くなっておりました。

右上の表をご覧ください。「算数の勉強は好きですか」という問いに対して、64.9%の児童が肯定的回答をしました。こちらは府・全国どちらの平均をも上回っております。「算数の勉強は大切か」「算数の授業内容はよくわかるか」「算数の授業で学習したことは将来社会に出たときに役に立つと思うか」という問いに対しては、約90%の肯定的回答がありました。

続いて、問題別に見ていきます。15ページの上の問題をご覧ください。66÷3という割り算の筆算の仕方が書かれてあります。右下のところに、途中の商を立てている状態の筆算があり、この「2」は何を表しているのかを問われています。この問題の正答率が51%、約半数の児童だけが答えられたということになります。おそらくこれが、「66÷3の筆算をして答えを出しなさい」という問題であれば、ほとんどの子ができるのではないかと思うのですが、このように各段階の商の意味を考えるとということになると課題が見られます。

続いて15ページの下の問題です。算数の問題で、一番正答率が低かった問題です。ニュースでも取り上げられていたので、ご存知の方もいらっしゃると思いますが、テープを直線で切って作った2つの三角形の面積の大小を判断し、その理由を説明するという問題です。3番が正解ですが、まず3番と答えられていた児童は36.7%です。しかし、理由も書くとすると18.9%の正答率になっております。どういったことを書いたら正答かという、「三角形の面積は、底辺×高さ÷2で求めることができます。㊸と㊹の底辺はどちらも3.2cmなので等しいです。㊸と㊹の高さは、テープの幅がどこも同じ長さなので等しいです。だから㊸と㊹の面積は等しいです。」このように答えられた児童が18.9%でした。誤答では、4番を選ぶ児童が多かったです。4番は、「このままでは比べることができません。」理由は、「はっきりした高さが書かれていないので、このままでは面積を求めることができない。」等と答えた児童が13.9%いました。このように見えてきた課題

から、具体的な数値が示されていない場面において、問題を解決する際に必要な情報を主体的に見いだしたり、適当な数値を当てはめたりして考えることができるように指導することが大切であると考えております。

課題のある問題ばかりを取り上げていたのでここで 94%の児童ができていた問題をお伝えします。16 ページの下の問題になります。図があり、同じ椅子がたくさん並べてあります。一脚ずつ積み重ねていくと高さが変わっていく、その関係を見ていくという問題です。この表のAに当てはまる数を書きましょうという問題が最も正答率が高かったです。

17 ページをご覧ください。毎年、全国的に見ても正答率が低い「割合」の問題です。今回は「割合が 30%になるものを、アからオの 5 つの中から 2 つ選びましょう」という問題でした。比較的やさしい問題ではあるのですが、正答率は 5 割を切っていて、引き続き課題となっています。

以上が小学校の結果の詳細になります。次に中学校の詳細についてです。

◎指導課長補佐（表一成）18 ページ以降をご覧ください。19 ページにまず、中学校の国語の概要が載っております。正答率等に関しましては先ほど山本が述べた通り、中学校は全国・大阪府より低い数値となっております。特徴的なところは、「国語の授業の内容はよくわかりますか」という質問に、全国や府より「よくわかる」と答えております。こちらには 2 つの見方がありまして、「自分たちはよくできるんだ」と思っていること自体に関しては良いことだと思うのですが、正確に自分の実力を捉えられていないのではないかと、もしくは、学校での評価が適切に行われていないのではないかと、といった見方もあります。左下のグラフを見ると、「知識・技能」「思考・判断・表現」ともに全国より低くなっていますが、どちらかというところ「思考・判断・表現」の方が得意な結果となっております。こちらに関しましては、国語の授業は、最近アウトプット型の授業やプレゼンの授業をたくさん行っておりますので、そういったところが反映したのかと思います。一方、単なる漢字の書き込みができない、また後に詳しく述べるのですが、本当に些細な語彙を理解していない、などが見受けられます。

20 ページ、21 ページでは、子どもたちの様子を数値で表したものをグラフ化しております。胸の張れるような数値はなかなかなく、どの観点やどの問題形式でも府や全国より低い数値となっております。

22 ページに移ります。国語の結果の傾向と課題です。まず、傾向としては、内容を検討する、目的に沿って自分の考えをまとめることに関しては概ねできています。概ねできているというのは 7 割程度できているものです。ただ、2 つの文章や 3 つの文章を比較して、文章同士を対応させて問題に当たることについては苦手な傾向にありました。文章を比べるというものがどういったものなのか、具体的に見ていきます。

23 ページにつきましては、著作権の関係から画質を落とした問題を掲載しております。本の読み方について、どんなふうに進めるとよいだろうかという意見が、2 つ書かれてあります。この 2 つを比較して、どういったことを見取れるかということが 24 ページの問題です。2 つの文章を比較した上で、共通している表現の効果はどれかを選ぶ問題です。1 から 4 の選択肢について、それぞれ、「引用しているか」「敬体で述べられているか」「問いかけはあるか」「冒頭の一文で結論を述べているか」というように、まず、設問を自分で簡単に落とし込む力が必要で、先ほど申し上げました、些細な語彙の力が足りていないという印象がありました。1 番の「どちらも引用がある」が正解ですが、2 番の「敬体で丁寧に述べることで」の「敬体」という言葉が「丁寧な言葉」という意味であることが捉えられていないのではないかと、考えられる生徒が 10.9%います。同じく

4番ですが、「冒頭の一部で結論を述べているか」、こちらは2つの文章の冒頭を読むとわかることではあるのですが、おそらく「冒頭」という言葉が「文章の始めの部分」であるということが捉えられていないのではないかと考えられる生徒が、21.1%、5人に1人いるという現状です。片方の文章では見られる表現なので、片方だけを見て判断をしてしまったとも考えられるのですが、きちんと両方読み比べた上で、表現の効果を選ばなかった生徒が32%、3人に1人程度になっております。3番の選択肢「問いかけはあるか」に関しては、問いかけはどちらにもないので、これを選んでしまっている13.8%の子どもたちというのは、おそらく、問題を読むのを諦めてしまって、勘で答えてしまったのではないかと考えられます。

続きまして26ページです。判じ絵というなぞなぞのようなものについてのレポートを読んで、問題に回答するものです。問題の判じ絵の例に倣って、「AとBのどちらの判じ絵について解読の方法を説明するか」をまず自分で選び、Aであれば「桜の真ん中がないから皿と読む」、Bであれば「砂が逆さまに書かれているので、ナスと読む」ということを説明するのですが、こちらに関しては、先ほど小学校の説明でもありましたように、条件が提示されており、解読の説明の仕方について、「どこがどうなっているからどのように読める」というように具体性がないと正解にならないのですが、例えばBについて「砂が逆だからナス。」というふうに事実だけ書いてしまって、どのように読み取ったのかが書かれていないなどといった面がありました。

29ページにつきましては、皆さんご存知かと思いますが「竹取物語」の原文と現代語訳、さらに星新一の現代版小説、この3つの文章が掲載されております。これまでの中学校の授業では、原文と現代語訳を用いて授業を進行することが非常に多かったのですが、これは古文に触れる機会の増加や、古文に対して興味関心を引くために、現代版小説も授業で使っていきたいと思いますという国のメッセージだと聞いております。

具体的な問題に移ります。30ページです。大変有名な表現である「いと」という古語、「いとおかし」でよく使われる「いと」が、現代語訳のどの部分に対応するのか、また、現代版小説ではどのような表現になっているのか、両方とも抜き出しなさいという問題です。こちらの問題が、国語の中で全国との差が1番大きく、14%の差がございました。「いと」に関しては、割と有名な表現ではあるかと思うのですが、現代版小説で「いと」は「まことに」と訳されており、日常生活で中学生が「まことに」という表現を使用する機会はあまりないかと思われます。大人が問題を見たときに、これは知っているだろうと考えがちなのですが、ひょっとしたら「まことに」という言葉を知らないのではないかと、馴染みがないのではないかとすることも考えられます。「まことに」の無回答が15.7%あり、単に現代語訳だけから選んでしまって現代版小説から選ぶのを失念してしまったとも考えられますが、やはり国語に関しては、基礎的な語彙の力の習得も必要ではないかと思わせる問題でした。

32ページに移ります。こちらも文章を比較して、なおかつ条件に合致する文章を書く問題です。「現代版小説で星新一が工夫を加えて、表現している部分がある。どこがどのように工夫されていますか。」と聞かれているので、「どこが」「どのように」工夫されているかがわかるように答えないといけないのですが、33ページに記載しているように、「竹取の翁を竹取じいさんと表現した。」で終わってしまい、「どこが」についての説明のみに終始してしまっている例や、具体的な表現を取り上げずに、「現代版小説の竹取物語の方が物語らしく面白くなっている」といった、「どこが」について明記されていないなどのように、条件に合致させて答え

ることができなかつた生徒が20%以上います。無回答も非常に多く、29.9%となっておりますので、半数以上は難しかったという状態でした。こちらは、全問題の中で一番正答率が低くなっておりました。

続きまして、34 ページ、数学です。数学につきましても、数値は、府や全国を下回っております。数学に関しては、国語と違い、「思考・判断・表現」よりまだ「知識・技能」の方ができる状態にありました。35 ページ、36 ページに関しましても、そういったことが数値グラフとして表れています。

37 ページ、傾向と課題です。数学に関しては、単純な知識を問う問題がよくできた傾向にありました。「-5、0、3、4.7、9」の中から自然数を選ぶ問題は、かなりよくできておりました。単純な計算もよくできた印象です。ただ、先ほど国語で文章を比べて読み取ることが苦手でしたが、数学に関しても、与えられた表やグラフ、文章中の会話などをキャッチしながら問題に当たっていくところに関して課題が見受けられました。

まず38 ページ、39 ページ。こちらは数学の中で正答率が1番低かった問題です。「箱ひげ図」というものが、新学習指導要領に移行して以来、中学校2年生で新しく導入されております。中学校1年生でヒストグラムを勉強した上で、新しくグラフの表現の方法を学ぶ流れです。ただ、単元の中で学習が終結してしまいがちで既習事項とのつながりが意識できていないなど、まだまだ授業改善の余地があるのかなといった状態です。38 ページにはグラフや表がございまして、様々なところから数値を読み取って、正答の条件に合致する文章を選ばないといけません。この様々な情報を読み取るころに関しては、全国的にも正答率33.6%と課題は大きく、府の説明会などでも大きく取り上げておりましたが、本市に関しても大きな課題と捉えております。「箱ひげ図」は、データの散らばりを4分割しまして、第1四分位数から第3四分位数という呼ばれる真ん中2つの区切りについて大きな四角・箱で表現し、最小値から第1四分位数、第3四分位数から最大値、要は端っこの両サイドを傍線の「ひげ」で表した図です。こちらに関して、例えばグラフが右に寄っている傾向にあると、データとしても全体的に右に寄っているというような見方をするのですが、最小値だけに惑わされてしまったり、そもそもの箱ひげ図の意味が理解できていなかったりというところで、20%以上の不正解率がありました。こちらに関しては、私自身もそうだったのですが、現場にいた時、初めて箱ひげ図を勉強しました。私が中学生の時には習っていなかった問題なので、「初めて出会った。どう指導していいのか。」という状況であり、教員側が子どもたちの理解を深めるための手法や、この先の授業のあり方を研究する必要があります。

41 ページに移ります。マラソンについて、地点ごとの記録や走っている様子をグラフにまとめたものになります。問題(1)、「2つの大学の選手の駅前の通過時間の差は図上の点のどこを読み取ればよいですか」という問題で、こちらは、全国との差が非常に大きかった問題です。「駅前の」と指定されておりますので、左下の表から、「駅前はスタート地点から4000メートルの位置にある」と読み取り、真ん中のグラフを縦に見て、4000メートルを見つけた上で、「点Dと点Hが4000メートルに当たる」と読み取らないといけないのですが、これに関しましても、そもそも読み取れなかつた、もしくは、かなり後半の問題なので、ここまで到達しなかつた、読まずに回答してしまったなども見受けられました。点DH以外の横並びを選んでしまっているものに関しては、表をうまく読み取れずに答えてしまったものと捉えられますし、そもそものグラフの読み方を理解しておらず、点Aと点Hを選んだ生徒に関しては、「とにかく一番遠いところが差だろう」などの捉えがあつたりしました。ただ、目立つのはそれ以外で、駅前での記録の差を聞

かれているのに、点Aと点Bのように、全く見当違いのところを選んでしまっている生徒が24.2%、4人に1人は適当に答えてしまっている、そのような状態にございました。

42 ページに移ります。こちらは、「それぞれの大学の通過点を結ぶとほぼ直線のグラフになるが、直線で表されているということは、何が一定なのか」を選ぶ問題です。グラフの傾きが一定ということは速さが一定である、単位時間あたりに進んだ距離が一定と考え、アが正解ですが、恐らくこちらは数学的な捉えが弱いと考えられます。ウ「走る道のりが一定」と答えた生徒が20.4%、5人に1人いました。マラソンなので、それぞれの大学は同じ距離を走るのですが、それにはグラフは関係なく、もちろん一定なので、数学的なグラフの見取り方に課題がありました。

続いて英語です。英語に関しましては正答数が低いことに留まらず、「英語の勉強は好きですか」という質問に対しての肯定的回答が、かなり低い数値となっております。これは授業のあり方なのか、そもそも小学校での英語教育、外国語教育活動からなのか、なにが原因か探っていく必要があると感じました。たまたまこの学年なのか、3年に1回しか英語の調査はありませんので、原因については分析が難航しておりますが、間違いなく課題であるというところです。

44 ページ、45 ページにつきましては数値、グラフになっております。全国的にもニュースになりましたが、英語の「話すこと」調査に関しては、全国の平均正答率がとんでもないことになっておりまして、45 ページのグラフは、大きく偏っております。

46 ページ以降、英語の従来の授業でよくあった空欄を埋める問題は、比較的よくできました。なので、これまでの授業でやってきたようなことはできるとなると、今後の授業改善が必要ということも見て取れます。情報を正確に聞き取ったり読み取ったりすること、そもそも英語を読めないという課題が大きくあることがわかりました。読めないで、「社会的な話題について短い文章の要点を捉える」ことは、これも後に詳しく述べるのですが、かなり厳しい現状でした。

47 ページです。こちらはリスニングの問題で、道案内についてですが、全国との差が非常に大きかった問題です。道案内といえば、ターンライトなのかゴーストトレートなのか、オンユアどちらなのかというところですが、そこに関して聞き取りが難しかったようです。基礎的な部分に関して、英語は課題が多く見られます。

48 ページです。短文を読み取って、合致するグラフを選んでくださいという問題です。こちらの短文の日本語訳を簡単ではありますが載せております。「南市への旅行者（2005年）は1000人で、10年間伸び続け、2015年に2000人を越えた。南市からの海外への旅行者は増えていない。」という文章です。なので、1のグラフが正解となります。年代は数字なのでキャッチできますが、その他の細かいところ、例えば、英文の4行目「didn't go up」と否定形があるのですが、「up」だけを読み取って、上がっていると読み取ってしまっているのではないかと考えられます。

49 ページです。こちらに関しましても、短文を読んで短文と最も合致する文書を選ぶものです。選択肢4つをご覧ください。日本語訳も付けておりますが、日本語で読むと、4つ目の選択肢だけ詳しく書かれておりまして、1、2、3に関してはさらっとした文になっています。なので、この選択肢さえ読めば、左の文章は読まなくても4番と答えられるような問題ではありますが、これ以外を選んだ生徒が52.6%。半数以上が勘で答えてしまった、もしくは大問8番なので時間がなく、とにかく書かないといけないと思って書いてしまったというこ

とが見て取れます。

50 ページ以降になります。「話すこと」調査です。ご覧になって驚かれると思いますが75%程度の子どもたちが5問中、1問も正解数がありませんでした。全国的に見ても平均正答数は12.8%と、かなり低い数値となっており、問題自体批判が集まっている状態ではございます。ただ、全国と比較した時に泉大津の目立つ部分は、全部正解が2人おりました、割合で言うと全国より多くなっております。

51 ページに参ります。傾向と課題ですが、基礎的な表現の理解はできています。課題に取り上げました、例えば、「未来表現や疑問文の特徴を理解するとともに」というところですが、子どもたちの回答累計を見ていますと、理解はあるのだろうなということも見てとれました。後に詳しく述べます。

52 ページです。こちらはオーストラリアで動物園を回っていて、先ほど象の赤ちゃんを見てきたという流れがあります。「あなた」が想像しているイラストで、次の予定としてカンガルーを思い浮かべており、「次に何がしたいですか。」と問われた際の回答を7秒で答えるという問題です。次に何が見たいかを問われたら、カンガルーを見ると答えたくなるかと思いますが、未来の表現「be going to」の表現を適切に取り入れつつ、カンガルーを見たいんだという表現ができて初めて正解となっており、その正解率が4.6%でした。未来表現を一応使ったのだけでも、惜しくも外れてしまったという割合が18.2%、「be going to」という表現は使わず、とにかくカンガルーと答えた割合が53.0%なので、なんとか答えようとした子どもたちが7割を超えているという現状に関しましては、肯定的に捉えてよいのかなと思っております。ただ、細かく文法等をきちんと習得し押さえていく必要があります。

53 ページにつきましては、こちら「あなた」が、カンガルーが何かを食べている様子を思い浮かべるイラストがありまして、これをもとにカンガルーについて何か質問をしないといけない、という問題ですが、「カンガルーが何かを食べている絵だ」ということがキャッチできなかった生徒が44%います。「カンガルーについて質問して」と言われたから、「カンガルーはどれぐらいいるの」など、カンガルーに関する質問は頑張ったのに、食べていることと関係がないから不正解という子が44%もいるのは、すこし残念です。頑張って食べているものの質問をしたが、文法の間違いがあった生徒が21%なので、この問題に関しても、7割程度の子は、頑張って答えようとしたというところは評価できるところでございます。

続きましてアンケート結果でございます。生活習慣・学習習慣についての質問項目が55ページから66ページまでです。こちらに関しては小学校中学校とも概ね良好な回答が多くございました。やや中学校に課題が見受けられ、一番課題と感じたのが62ページの質問16、「昨年度までに受けた授業は自分に合っていたか」という、個別最適な学びが実現されていたかというところで数値が低いこと、また、63ページの質問17、対話の活動が少ないことです。65ページの質問21、学級・学校を良くするための解決方法についても、対話がやはり中学校は少ないです。そういった点からも、一方的な授業がまだまだ多く、中学校の授業改善が必要かと感じました。子どもたちも主体的に前のめりになっていない、家庭学習時間も少なくなる、ということにも繋がってるところがあります。

67 ページ以降、「地域社会との関わりについて」のアンケートが2ページございますが、こちらに関しては小中学校ともに低い傾向でした。地域行事への参加などについてですが、コロナ禍の真っ只中を経験した子どもたちでしたので、この子どもたちが、より社会に打ち解けていけるような仕組みづくりは、学校内外

問わず必要であると感じます。

69 ページ以降の「規範意識・自己有用感について」は、全体的にやや偏りのある結果となっています。例えば、「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」という質問に関して、中学校は肯定的な回答が少ないです。小学校に関しても、強い肯定が全国より目立って低い結果でした。道徳の授業での話し合い活動については、小学校中学校ともに、非常に活発に取り組んでいたことが66ページの質問23から読み取れます。話し合い活動は小中ともに活発なのに、規範意識に関しては低いという結果ですので、話し合っただけで、真により良い考えにたどり着いているか、自分自身の考えが深まっているか、授業の形式だけにとらわれず、目的をしっかりと達成しているかというところに目を向けていく必要があると感じます。

最後 72 ページから、「安心感・充実感・幸福感について」です。こちらは、学校に行くのが楽しいかというところで課題がみられます。友人関係についてもあまり満足していない現状が見て取れますが、74 ページでは「普段の生活の中で幸せな気持ちにはなる」と、小中ともに答えておりますので、それ自体は良いことではございますが、学校で幸せを感じてもらえているかどうかというところ、そうとは限らない現状がありますので、学校がより安心・安全な場になることも大切なことかと感じました。以上が質問紙についてです。

◎指導課長補佐（山本圭亮）以上が全国学力・学習状況調査の結果でした。続けて、大阪府独自で行っている小学5年生・6年生を対象とした、「小学生すくすくウォッチ」という調査の結果概要についてご説明させていただきます。この調査は全国学力・学習状況調査とは問題の内容が少し違っているところがあり、特徴的なところをピックアップしお話しさせていただきます。

国語ですが、言語能力、読解力の基盤となる基礎的・基本的な言葉等の理解を問う問題、また、文章に書かれている意味を正確にとらえる力・リーディングスキルを測る問題などが出されております。また、わくわく問題というものがあり、教科横断型の問題、日常の活動や現代的な諸課題等をテーマにした問題、また、文章やグラフ等の様々な資料を題材に、資料を読み取ったり、自分の考えを表現したりする力を問う問題が出されております。

次に、各教科の結果についてです。5年生の国語では、どの分類においても大阪府の平均正答率を上回っております。ただ、漢字を使って書く問題やローマ字を正しく書く問題、故事成語の意味を正しく理解する問題では正答率が低くなっていました。

算数では、図形領域で府の平均正答率をやや下回っていましたが、その他の領域では上回ってました。

続いて、5年生理科の問題です。すべての分類で府の平均正答率を下回ってました。6年生の理科においても、府平均を下回っているところがいくつか見られ、課題があると考えております。習得・活用・探求というプロセスを踏みながら、学びを充実させていく必要があると感じております。

続いてわくわく問題についてです。こちらは、5年生と6年生どちらも同じ問題で実施されております。5年生と6年生の正答率を見ますと、すべての分類において、6年生が上回っています。系統的な学習を通して着実に成長しているということが読み取れます。6年生においては、府の平均正答率をすべて上回ってました。また、5年生・6年生ともに、「ある事柄について、意欲的に工夫して相手に伝える問題」では正答率が高くなっていました。一方、「図や表から読み取り、資料の内容を関連付けて論理的に考え、それをもとに自分の考えをまとめ、伝えることを目的とした問題」においては、正答率が低くなっておりまし

た。

続いて、児童アンケートについてです。5年生・6年生ともに、人と関わる力の「共感する力」や「相手の理解」が他の項目と比べてやや高い結果となっております。一方で、目標に向かって頑張る力の「ぶれない心」や、気持ちをコントロールする力の「落ち着き」、好奇心の「自分の疑問に対する答えを求める力」は他の項目と比べて低い結果となっております。

以上の各種学力調査の結果より、泉大津市の学力に関する課題としましては、大きく2点挙げられます。1点目が基礎的・基本的な言葉等の知識・理解、2点目が文章や図・表などの資料から情報関連づけて読み取り、論理的に自分の考えを構築し、表現することです。

これらを踏まえまして、今進めている学力向上プランにおいても、授業改善を進める上で、日常の授業において必要な工夫や準備ができているのかどうか、子どもたちに言葉の力を育むために必要な言語環境を整える取組みができているのかどうか、また、授業改善に向け、学校で行っている取組みや手だては課題に正対したものになっているのか、という視点も踏まえ、日々の授業改善を進めていきたいと考えております。

- ◆教育委員（奥健一郎）非常に詳しいリサーチ、ありがとうございました。非常に勉強になりました。細かいこと言えきりがないのでしょうが、根幹というか大枠のところをお聞きしたいのですが、3ページの平均正答率・無回答率について、小学校から中学校に移行したらこういう状況ということで、これは泉大津市の生徒が必ずしも能力が低いというわけではなくて、小学校の時には良かったのに中学校になったらガタッと落ちる根本的原因というのは、端的に言えば何があるのでしょうか。

- ◎指導課長補佐（表一成）やはり授業のスタイル、子どもにつけたい力が明確になっていて、それをつけるための取組みや学習活動がなされているかというところは、原因の1つかと考えられます。一部では、小学校から中学校に上がる際に、私立に進学する子がいるという意見も聞くのですが、それを加味しましても、ここまで下落しないということは、個人的に分析をして見て取れた部分ではあります。なので、授業のあり方、進め方として、大きな違いがあるのではないかと考えております。

- ◆教育委員（奥健一郎）私学に転校する人がいるからと、現場側から意見が出ること自体が、危機意識があまりないのではないかなと思うんですね。結果が出ているということは原因が絶対にあるので、原因がいろいろあるのかはわかりませんが、その原因というものに着手して、まずは改善しようという気持ちとか意識とか、それがなくて話にならないと思う。手段は講じてても、意識の問題が根底にあるのではないかなというのが、転校している人が多いからですよという意見が出ることから伺える気が私にはします。

それから英語は本当に個人的にはショックでした。もちろん全国的に中学校の英語だったらいろいろ難しいものが出てくると思うのですが、それにしても条件は全国同じなので、どうしてこんな結果になるのかなという気がしました。枝葉の部分ちょこちょこつつくのではなく、大枠の根本の部分からまずガチッと改めて、初めて枝葉の部分改善されていく、土台ができていくということだと思うので、そこをまず考えないといけないと思います。

- ◆教育委員（西尾剛）奥委員がおっしゃったのですが、毎回そうなっているような気がするのですが、確かに小学校の時はほぼ全国平均なのに、中学校になると全国より、1割落ちて9割になる。例えばこの令和4年の中学3年生は、平成31年の小学6年生で、平成31年の時点、6年生の時点では、ほぼ全国平均の点数が

取れていたのに、中学3年生で3年経つと全国の9割しか取れていない。中学校の教え方なのか、勉強しなくなった生徒に原因があるのかわかりませんが、とにかく何らかの原因があると思いました。毎回そうだった気がするのですが、原因追及とといいますか、中学の先生には酷な言い方かもしれませんが、やっぱり歴然と結果は出ているわけだから、何らかのもうちょっと突っ込んだ分析が必要なんじゃないかなと思いました。

- ◆教育委員（奥健一郎）優秀な子が転校するからですというような意見が見受けられること自体が危機感がない。
- ◆教育委員（西尾剛）全国どこでも優秀な子が私立に行くから条件は同じだと思います。先生の責任かどうかわかりませんが、中学生になって皆が勉強しないようになっていただけかもしれませんし。
- ◆教育委員（奥健一郎）それだったらそれも全国的にそうですよね。
- ◆教育委員（澤田久子）この結果を、中学校の教師がどんなふうに捉えているか。こんなに低くなっている、もっと頑張らないといけないなというふうに捉えられているのかどうか、危機意識があるのかどうか。どうしても中学校は教科別なので、国語や数学や英語の先生はそう思っている、社会や理科の先生はどうかはわからない。社会や理科は、調査はしていないけれど、絶対同じ傾向だと思うんですね。言葉・語彙がわからないというのは、社会ではもっとしんどいことになると思うので、調査したら同じ結果、または、もっとひどい調査結果が出るかもしれないと思うので、すべての教師がこれは課題だというふうに、学校として捉えられているかどうか。教育長が、中学校の授業は課題だと何年もおっしゃっているけど、そこをどこまで捉えられているのか。これを、このままじゃだめでしょとしっかり捉えられるような状況にならないと改善はしていかないのかなと思います。

あとは語彙が少ないということについて、これは全国的なことだと思うのですが、本を読む機会が減っている。小学校は割と読書教育を頑張っているように思いますが、特にシープラもできて、一緒にやっている感じはするけれど、中学校の動きがあまり、やっているのかもしれないですが、ちょっと見えないなと思います。その辺りの読書活動とかもっと充実していくような、日々のちょっとした隙間時間をうまく読書に結びつけていくとか、それも学校全体で取り組んでいかないと難しい。そういうところを頑張ってもらわないと、なかなか伸びていかないのかなと感じました。

- ◆教育長（竹内悟）正直に言って何割ぐらいの先生が危機感を感じていますか。2人の指導主事が一緒に回って、管理職とこの結果の話をして、大変ですよこれは、と伝えていきますよね。「じゃあ何をしないといけないのか」と、気づいている人が1割もいるかなと思います。さっき澤田委員が言われたように、テスト科目以外の教科にも、複数の情報を文章から把握して回答を導き出すという考え方が求められているわけですよ。体育でもそれを求められている。準備局面があって主局面があって終局面があるという運動構造の中で、みんな主局面だけを見ているけど、今、最も言われているのが準備局面です。そういう観点で授業を作っているのかというところが、いろいろ授業を見に行っていますが、中学の先生は全くなんです。学力担当の先生方はものすごく危機感を持っていると思うんです。だけど、何で変わらないのだろうという認識で、私が教育長になって5年目です。小学校も、最初はやっぱり良くなかったけど、今は8校のうち学識経験者が5校に入っています。「リーディングスキルの学び」とか、「読み取る力をつけるために」とか、「書くことを重視して」とか、小学校の先生はそれぞれの学校でみんな同じ方向を向いているんです。それを始めて2年3年経っている現状です。それに対

して市教委も、すごくサポートをしてきた結果がこうやって出てきているというのは事実です。じゃあ、中学校が学びについて、授業づくりについて何かやっているかと言うと、どこの学校も何も無いのが現状です。

- ◆教育委員（奥健一郎）下手すると、小学校の時にきちっと勉強する癖をつけたのが、中学校で楽を覚えちゃうとやっぱり人間はその通りいっちゃいますから。
- ◆教育長（竹内悟）先ほど西尾委員が、平成31年の小学生6年生が令和4年度の中学校3年生と同じ子どもで、結果が下がっているという話をしてくれていましたが、その下がり率の話をしてもらえますか。
- ◎指導課長補佐（表一成）校区ごとに、31年度の小学校6年生と令和4年度の中学校3年生がどのように変化したのか分析をしてみました。子どもひとり一人が、小学校でこれくらいの平均点だったら、中学校ではこういう点数帯だろうという分布を作ってみて、その中で私立へ出ていく層はこういう層だろうというところを抜いて図に表して、実際の結果と照らし合わせてみると、特に東陽校区が大きく下がっているんです。東陽中学校区というと、小学校では比較的優秀な学校が多く集まっていますが、下がり幅が大きいです。結果を見ると誠風中学校は、点数としては大変課題があるのですが、それは小学校のときからです。ですから、それほど変化はございません。小津校区に関しては、少し伸びていたところがありました。東陽中学校の授業を見ると、3中学校の中で一番大人しく授業を受けています。しかし見方を変えると、子どもたちが何の活動もしておりません。きちんと座って先生の言うことを静かに聞いていて、一見良い子なのですが、授業の内容がしっかりと頭に残っているのかなという感じがします。人が発表している時も、一見するとその方向を向いて、しっかり聞いていると思うのですが、それが学びに繋がっているのかということや、先生はずっと説明しているけれど、子どもたちがあまり聞いていないということや、キャッチできていないのではないかと、その辺りに授業が変わっていない原因が感じられます。いかに子どもたちを授業に主体的に参加させて、見かけ上でなくて頭の中も活発にさせて、子どもの中に学びを残せるかというところが大事になってくると思います。
- ◆教育委員（奥健一郎）簡単に一言で言うと、考える力だと思うんですね、学力というのは。考えることができないということは、企業に行って勤めてもいろいろ原因を考えることもできないし、泉大津市長に言わせれば、国家の言いなりになって1人で考えることができない、全ての国家施策に関しても。ただ良い子という表現だけができる、そういうことですよ。考えることができないというのは、まずいというか、最悪だと思います。考えることの意味だと思うんですよ、学力調査というのは簡単に言うと。科目は違えどですね。
- ◆教育委員（池島明子）中学校は3学年で、専門の科目を教えられるわけなので、こんな言い方をしたら失礼かもしれないですが、小学校の先生の方が大変だと思うんです。どの学年に行くかわからないし、いろんな教科を教えないといけないし、というので幅広く知識などが必要だと思うのですが、中学の先生は特化して3種類の学年の授業方法を集中して授業計画立てて行えば、すごい良い授業づくりができていくはずなのではないかなと思うんです。しかし、例えば、「授業で学習したことが将来役に立つと思いますか」という問いに対してもイメージは低いですし、中学校で義務教育が終わって、高校から先というのはその応用編だということが中学校に多分伝わりきっていないので、澤田委員もさっきおっしゃったのですが、教科教育だけじゃなくて、その教科と教科の間をつなぐような、この間お話があった、体育の授業でも英語の要素を入れた授業をする、音楽の授業でも英語の要素を入れて授業をする、合唱コンクールであっても修学旅行であっ

ても、いろんな勉強の果てにそれがある、というようにしないといけないと思います。これはこれ、歌えばいいだけ、修学旅行みんなでどこかに行って楽しかったらいい、ではなく、修学旅行にしても何か討論をして話し合いをして、だからこんなふうにやろうというふうに、1個ずつの積み上げということがいろんな場面で深く強く伝わるようにしていかないと、小学校で作ってもらった土台が土台のままで、その上に何も積み上げられていないというのが、全国と比べて、いろんな意識が低いことに繋がるんじゃないかなと思います。現在、十分中学校の先生は努力をされていると思うのですが、やっぱり今のままだったらこのままなんだというのをわかってもらわないといけない。何かをする時に市教委側も「必ずこういうことをしましょう」というふうに例を示して投げないと、もうちょっと頑張りなさい、頑張り頑張りと言ってもどのように頑張ったら上がるのか、先生もお困りになっているのかなと思います。「勉強の内容がわかっています」と生徒は答えているけど、結局わかっていないということが事実なので、わかっていないことを正直にわからないと言える人間を育てないといけないのに、表面上だけ大丈夫ですというのが1番教育の中で駄目だと思うので、そこの根本的なところを泉大津独自の 방법으로、中学校教育をいろんな場面を変えていく仕掛けが必要なんじゃないかなと思います。

- ◆教育委員（奥健一郎）これ以降積み上げたとしても、砂上の楼閣を作るようなものです。そうなってくると、「所詮自分は駄目な人間なんだ」と思い込んで大人になってしまう。どうせ自分は落ちこぼれなんだと。そういう連鎖になっていくわけです。
- ◆教育長（竹内悟）中学校の先生の闇の部分があって、僕も中学校の教師をずっとしていたからわかるのですが、例えば、1学年に5クラスあって、先生はこの5クラスもしくは4クラスぐらい、1人で同じ授業を4・5回するんです。ということは、教材研究をしなくても授業の中で作り上げていって、最後の方の3クラス、4クラス目ぐらいが一番良い授業ができるんです。今の中学校の先生は、週20時間の授業を目途にしています。ということは、30コマの20時間が埋まるわけです。10時間余っていて空き時間なんですよ。生徒指導がいろいろありますが、10時間近くは空き時間です。その10時間で、教材研究をしていたらいいのですが、教材研究をしないで喋って職員室で過ごしたり、教科の準備室が中学校にはあるので、職員室にいらなくてもわからないんです。だから、僕がずっと言い続けているのは、管理職は働き方改革として先生方に早く帰れと言うなら、空き時間の監視までしっかりするようにということです。それで教材研究を進めることをしっかりさせて、授業もちゃんと見に行くようにと言っているのですが、なかなかそこまで把握できているかと言ったらできていないです。中学の先生はそれをずっと文化としているから、それを根本から改善しないといけないというのは、ものすごく大きなカルチャーショックだと思います。誰のために先生をしているのかという、先生という定義のところから話をしていかないと多分変わらないかなというぐらい。最近僕が中学の先生に対して、弱気になっています。何を言ったら変わってくれるのかなと。
- ◆教育委員（澤田久子）やっぱり教師自身が課題を見つけないと、管理職とか教育委員会、指導主事が一生懸命言っても、「はいはい」と聞き流したり、「確かにそうだな」と思ってもなかなか改善できない。自分の中から、「これはあかん。どうしたらこの学校変わるかな。」と、全員の先生が同じ土台で議論して、自分たちの中で、「まずこれをやりましょうか」ということを自分たちで見つけないと改善はしていかないとと思うんですね。私も小学校の教師をしていたので、学校を変えていくためには、上から目線だけではなく、「何からしょうか」というのを小さい

ことでもいいから自分たちで見つけて、「やってみてちょっと変わったな」という成功体験ができると、「またちょっとこうやってみようか」というふうになっていく。そういう話し合いのような感じで、「どうする？何からやる？」と投げかけるというところからやっていかないと、ずっと言い続けているけど改善していかない。どうやって進めていったらいいかというのは難しいけれど、違う投げかけ方をやっていかないと、中学校は改善しないのかなと。

◆教育委員（奥健一郎）端的に澤田委員からご覧になって、そのためには何をすればいいんですかね。おっしゃるように。「させられる」と「する」は違うわけですよ。言うのも恥ずかしいくらい当たり前のことかもしれませんが、自ら主体的に変えようという気持ちになるためには、我々にできることはどんなことが例えばあるんでしょう。

◆教育委員（澤田久子）そこは学校によっても違うと思いますが、やっぱりまずはこの結果を見て、「どうしよう？この学校で何ができる？」と、小さいことでもいいから、みんなでやろうよという話し合いが要ると思います。教師の中で、授業改善などをやっている人とやっていない人がいて、「やらんとあかんやろ。やろうよ。」という、そういう情勢というか機運というか、何かがなかったら変わらないですよ。

◆教育委員（西尾剛）さっきの下がり率のことですが、成績を取れる多くの児童が小学校から私立へ抜けることが影響しているのではないかということですがけれども、それは全国各地であることで、泉大津だけ特殊ということはないと思います。しかもその何人かが抜けたからといって、全国平均が1割も下がるような影響力はあるのかと。だから、そういう面もあるかもしれませんが、申し訳ないですが、それが原因とはいえないと思います。

◎指導課長補佐（表一成）おっしゃる通りです。なので、そういったところを加味しても、ここまで下がらないだろうという分析です。

◆教育委員（西尾剛）なるほど、そういうことですか。

◆教育委員（澤田久子）東陽中学校はそれをわかっているんですよ。伝えられているんですよ。

◎指導課長補佐（表一成）はい、伝えさせてもらいました。

◆教育委員（澤田久子）管理職とか学力担当は、どんな受けとめ方なんですか。

◎指導課長補佐（表一成）たまたまお伝えしたのが、当の令和4年度の3年生担当の先生だったので、「自分の年ちょっとあかん…」みたいな、捉えをしてもらえたのですが、我々も先生方全体にそれをお伝えするということはできていないので、どれだけ多くの先生が危機意識を持っていただけているかというところは把握できていないです。

◆教育長（教育長）学校の分析と考察は返ってきていますよね。中学校の分析と考察は、どのように書かれているのですか。

◎指導課長補佐（表一成）先生方の意識まで見取ることは難しい現状です。今年度につきましては、結果が返ってくる前の段階で、実際に先生方が解いてみて、生徒たちがそれを解けるとかを聞いています。できそうだな、難しいかな、絶対できて欲しい、などの選択肢があって、その中で「これはできる」と先生が思っていたのに、実際は解けていなかったというところが、1番、教師と子どものギャップだと思いますので、そういった予想と反した部分というのは、より原因を深く分析しないといけないですよ、というところを全校にお伝えさせてもらっております。それらを参考にされつつ、「こういったところに1番ギャップがあったから、これに関しては授業でしっかり定着させきらないといけないな」や、「今後の方針に生かさないといけないな」というところまでは、おそらくキャッ

ちして分析していただいていることと思います。ただ、それを実際に全教員が「さあ、やっていきましょう」という雰囲気であるかどうかは恐らくまだ課題かと思っています。

- ◆教育委員（澤田久子）この学力調査のこの考察が返ってきているということですが、中学校は全員でやっているんですか考察って。国語は国語の先生だけですか。
- ◆教育長（教育長）そうです。
- ◆教育委員（澤田久子）教科ごとでやっている。そこが課題ですよ。まず、それはだめだという話ですよ。みんなで考察して、国語だけの問題じゃないということ、中学校はみんなではないといけない。小学校はみんなです。5・6年生のテストだからその学年だけの先生でしていないし、みんなで考察します。そこはまず改善できる部分じゃないかなと思います。これはみんなの問題だよという考え方ですよ。まずそこを1つは改善できる。小学校の結果と中学校の結果を比較して見せたりして、こんなに下がっていますよ、中学校の授業づくり自体が課題じゃないですかという、その辺りですよ。そこを自分たちの問題だというふうに、自分たちで気づくというところが重要ですよ。
- ◆教育委員（奥健一郎）例えば組織にありがちですが、縦割り行政みたいな、自分たちの持ち場ではちゃんとしている、他のことは私のことじゃない、という意識を全体として持っている、全体が沈滞化していく。そんな雰囲気がひよっとしたら元凶かもしれないですね。
- ◆教育委員（澤田久子）中学校って教科別だったり学年だったりの繋がり強いけど、全体はそうじゃないのかなというふうに感じたりします。
- ◆教育委員（西尾剛）中学校の内申、例えば同じ内申の9でも、北摂の中学校の9と大阪の南の方の9は、価値が違うというふうに言われている。だから、調整が入るわけですよ。
- ◆教育長（竹内悟）チャレンジテストですね。
- ◆教育委員（西尾剛）そこですよ、何が違うのかということです。生徒の質は変わらないんだし、賢い子ばかり北摂に住んでいるということは全くないはずだから、後天的なものだと思うので、やっぱり教え方、もちろん地域性とか家庭の勉強とか当該生徒のやる気とかあるとか、複合的な要因ではあると思うのですけれども、やっぱり中学校のあり方を考えていかないと、いつまで経っても変わらないのではないかと思います。
- ◆教育委員（澤田久子）特に東陽中学校区の小学校の子どもたちは割と賢いレベルにいるということは、家庭の教育力とかがあるということですよ。それは中学校でなくなるわけじゃないので、そこは維持されているのに、中学校に行って学力が下がるということは、もう明らかに授業の仕方や教え方の問題だと思います。そこはぐっと伸びる。家庭にも教育力がある程度ある地域ということだからもっと伸びるはずですよ。そこを、「それではあかん」と中学校、特に東陽中学校の先生方が感じないと。子どもたち賢いから、先ほどおっしゃったように、「聞いているからいい」ということをして、あぐらかいていたらいけませんね。
- ◆教育長（教育長）近々に指導課も一緒に考えていきましょう。

※報告第16号終結

△日程第 2 報告第 1 7 号 泉大津市教育委員会の後援名義使用について

◎教育政策課長（大塚和弘）趣旨は、泉大津市教育委員会の後援等に関する要綱に基づき、後援を承認したので報告するものです。

報告対象期間は、令和 5 年 8 月 1 日から令和 5 年 8 月 31 日までです。

内容は別紙 6 をご確認ください。承認案件として 6 件、過去にも承認をしてきた団体、事業です。今回は不承認が 1 件ございまして、件名は国際交流&イングリッシュキャンプ、申請団体が宮城復興支援センターで、申請後、こちらからの電話連絡に対して全く対応が無く、メールでの連絡も大変時間がかかるということがあり、事業の実施が可能な団体でないと判断し、不承認としております。

※報告第 1 7 号終結

◆教育長（竹内悟）本日の案件は以上ですが、教育委員会会議規則第 3 8 条、「委員会は、会議において主題議案の処理が終了したときは、教育行政に関し自由討論を行うことができる。」により、自由討論を行います。今回の自由討論にあたっては、政策形成過程に係る案件であることから、泉大津市教育委員会会議規則第 3 4 条で規定する「人事に関する事件その他の事件について、教育長又は委員の発議により、出席委員の 3 分の 2 以上の多数で議決したときは、これを公開しないことができる。」により非公開とすることに異議はございませんか。

〈異議なし〉

異議がないようなので、自由討論は非公開とします。

午前 11 時 57 分終了

議事録署名委員

教 育 長

教 育 委 員